

1 パーティクル at と to の重要性

この章ではパーティクル **at** と **to** を扱い、それらが場所・位置や移動・動きとどのように関わるか、そしてそれらを用いた句動詞の意味にどのように影響するかについて説明します。さらに、句動詞というものをつくり出す上で、これら2つのパーティクルがいかに役立つかを示したいと思います。

前著『句動詞の底力』でも指摘しましたが、英語の一つの特徴は、

- 空間に敏感な言語であり、さらに、
- 空間が文法の中でどのように扱われ表現されるかに敏感な言語であること、です。

異なる言語を話す人々が、「空間」と「その空間内での物体の存在と動き」を異なる方法でとらえていることは十分に予想されることです。日本語を学ぶ人たちが「に」と「で」（「日本に滞在する」―「日本で滞在する」）、そして「に」と「へ」（「どこかに行く」―「どこかへ行く」）の差異を学ぶ難しさを考えてみてください。

この章では空間での位置と動き / 移動を表すパーティクルの代表とも言える **at** と **to** を扱います。しかし **at** と **to** について説明するといっても、もちろん私はここでみなさんに辞書の見出しのようなものを与えるわけではありません。英語における **at** と **to** の働きについては、おおよそ次のようなことが言えるでしょう。

- **at** は「位置」あるいは「特定の場所や位置や点に向けての移動」に関わっている。
- **to** は「特定の方向への動き」（しばしば特定の位置に向かう動き）に関わっている。

句動詞を難しく感じる理由として、句動詞が時に文字通り（具体的：空間での位置と動きを表す）、そして時に比喩的（抽象的）であり、そして多くの場合、その2つの間の中間の意味をもつことがあります。中間の意味と比喩的な意味を理解するには、学習者側にある程度柔軟な考え方が求められます。これは以下でおわかりのように **at** と **to** にも適用されます。（後ほど第8章で詳しく取り上げます）

2 at と to を用いた句動詞の分類

以下で **at** と **to** を用いた句動詞の例を示しますが、次の図のような構成になっています。

at	to
～での位置 ～への移動	～に向けられた動き・行動・思考 離れない
1. 攻撃 2. 標的を定める 3. 触れる 4. 留まる / 繰り返す	1. その位置にいる / いない 2. そのレベルに達する 3. 始める 4. 注意を向ける

各パーティクルの下にはその大まかな概念が示され、その下には派生するいろんな意味が示されています。以下 p.040 から示すリストでこの図の情報を繰り返します。

「**at** = ～での位置 / ～への移動」という見出しの下には、5つの小見出し（攻撃、標的の設定 / 注意を向ける、触れる、留まる、繰り返す）があります。

さらに低いレベルに進むと、句動詞の実例（フレーズまたは文）があります。ここでのデータには39の実例があります。その中から代表的なサンプルを選び、それらについてさらに説明します。